

# デッドストック考

”デッドストック”直訳すれば”死蔵品”。最近は、耳にすることは殆どない。もしかしたら「死語」なのかもしれない。しかし、対象を”モノ”から”お金”や”人”に置換え考えると「山の様に」あるのではないか。少し掘り下げて考えてみよう。

今更ながら、まずは”モノ”のデッドストックについて。例えば、婦人服。需要の見込み違いから時期を逸し、陳腐となって売れ残ったケース。また、一部部品の不良があるものの、改修すれば商品としての価値が蘇るが、その改修コストを回収する見込みが立たずに放置されている”モノ”等。つまり、売れる見込みが全くないにもかかわらず、簿価が計上されてしまう”モノ”。もしくは、廃棄・改修費用が在庫費用を上回る”モノ”等。平たく言えば「売れないことを知りつつも、捨てるに捨てられない”モノ”およびその状態」のこと。データベースのデッドロックが同じ論理であり、別の例として取り上げようとしたが、ややこしくなるから説明は割愛。結果”廃棄”が得策となるのであろう。

次に、”モノ”を”お金”に置換え考えてみよう。当「鯨のネタ・鯨のネタ」ページに於いて、2015/4/3「**■**デフレ脱却への処方箋」→2017/3/3「もし「金融滞留税」があったなら」→2017/3/17「続「金融滞留税」があったなら」の中で繰り返し述べてきたが、”お金”は陳腐にはならないし、”不良品”もない。意味なく滞留させる罪（取り締まる法律はないが）は重い。ただ単に「リスクを回避するためだけ」の「内部留保」や「蓄え」は社会の毒となる。つまり、名実共に「死蔵金」即ち「死に金」となり、経済の”悪循環”の根源となる。”血液”に例えると分かり易い。”血液”を滞留させると、”死”に至ることとなる。”生命”と”経済”の共通するロジック。

さて、最後に、デッドストックの対象となる”モノ”を”（組織の）人”に置換えて考えると、人は”モノ”や”お金”と違って、自ら変化する（させる）ことが可能である。つまり、主体的（自分の意思なり）に自分自身を使うことが出来る。「役に立たない」なら「役に立つ」ように、「効力を失っている」なら「大いに効力を発揮する」ように、自ら変わる（変える）ことが出来る。もし、組織から「殺されている」と思う（生きている証拠）なら、別の「生かされる」と思える組織に加入することも可能である。

なぜなら、実際（生物学的に）死んでいるのではないし、たとえ失敗しても「死ぬような思い」はあるかもしれないが、死なないから。もし、変わる（変える）ことに対して”リスク”を感じ、「リスク回避を目的とした現状維持」を選択するならば、「座して死を待つ」と同義であると甘受しなければならない。逆に言えば、変わる（変える）必要がないと思えば、変わる（変える）必要はない。その意思是自由であるから。